



「寺が生きる」の模索は続く

宗派を問わない集合型の永代供養墓「安福廟」を1989年に建てた新潟市・角田山妙光寺の住職が昨年11月、54代目に代わった。法燈継承式を祝う記念誌「妙光寺のこれまで」そして「これから」ができたという。上京した「先代」の小川英爾さん(85)に久しぶりに会った。

今こそ「宗派不問」の納骨堂や靈園はたくさんある。でも30年前はそうではなかったし、跡継ぎがない独身女性らは自分の墓はなかなか持てなかった。だから当時「かわいそうな女性のための墓」といわれもした。違和感があった。小川さんは裏返していく地方の寺院を研究し危機感を募らせていた。「檀家制度に頼っては寺の未来はない」。そう心に決めて新しい形の墓づくりに奔走した。

百八つの個墓を円墳形に配置し、時間がたてば中央の大きな墓に合祀していく斬新なデザイン。しかも永代供養費の一部を基金化し運用益で維持・管理するスタイルを確立させた。さらに大都市から来た新規「会員」と檀家たちが一緒に企画する「フェスティバル安福」も毎夏開催。新藤兼人さん、小室等さん、藤田君子さん……。趣旨に賛同して多様なゲストが訪れた。墓制度のひとつの「革命」をもたらした。

108ページの記念誌には700年続く寺の歴史から退任総代りのインタビュー、紙上法話集、寺庭(住職の妻)のエッセイまであって楽しい。でもいちばん印象に残ったのは、高齢の檀家さんが「必ずつ顔写真付きで載っているコーナーだ。兵役や戦時中の苦勞、80歳まで続けた野菜売り、孫のこと、趣味の写経……。住職自ら一人ずつついでいねいに書いて書いた。平凡にみえた日々は、実はかけがえのない人生なのである。「寺には過去帳があるけれど、これは『現在帳』なんです。こうして付き合っておけば、葬儀も法事も自然にしっかりとあれますよ」

葬送ジャーナリストの碑文谷創さんが編集後記の冒頭、こう書いている。〈本書は、「寺が生きる」とはじめる(START)か、を实践、模索した記録である〉

【社会部編集委員・滝野隆浩】

※次回は2月16日に掲載